

日本人のみた外国 中国の全寮制(?)幼稚園 (カルチャー・ショック)

著者	伊藤 えりか
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	121
ページ	45-45
発行年	2005-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005618

中国の全寮制(?) 幼稚園

伊藤えりか

その週末、上海で数年振りに会った友人一家は、三歳の女の子を中心に笑い声が絶えなかった。友人の子供が月曜日から金曜日までの全寮制幼稚園（中国語で「全託園」）から帰ってきていたのだ。幼稚園で習った歌や踊りを一生懸命披露してくれる。私の友人は大学で日本語を学び、日本留学の後に日系企業に勤めている。日本の事情もよく知るだけに、「日本では考えられないでしょう。日本で三歳の子を幼稚園に一週間預けっ放しなんて話をしたら、私は残酷な鬼母だと思われるよね」と言う。

別に鬼とは思わないが、幼稚園児が寮生活をするという話は初耳だ。私も興味津々でいろいろ尋ねてみた。「夜は何人の先生が付くの?」、「一日の生活はどんな感じ?」、「お風呂などの衛生面は?」だが、「全託」だから預けている以上、元気で楽しくやっていたら安心という様子だった。

この種の幼稚園の歴史は意外にも古い。文化大革命（一九六六―一九七六年）の頃、幼い子供を持つ世代は政府の「下放」政策で、住まいから遠く離れた農村で労働させられた。子供は同伴できず、子供たちの世話はその祖父母に委ねられた。当時の中国は子沢山だった上、老人が何人もの幼い孫を育てるのは大変だ。そんな老人たちのた

めに、月曜日から土曜日まで子供を預かり、週末だけ祖父母の家へ帰す幼稚園ができたという。中国では共働きが一般的なので、共働き世帯の子育て支援の目的も兼ねていた。私の友人にも、全託園に自分がお世話になった人も、子供を預けたことがある人もいる。決して珍しい話ではないようだ。

教育も市場経済化されつつある今の中国では、「少しでもよい幼稚園へ入れたい」という一人っ子世代の親心を反映し、入園競争が激しくなっている。全託園も例外ではない。入園時の寄付金や担任の先生への付届けで、月謝以外にもかなりのお金がかかるという。もちろん毎日通う幼稚園もあり、数も多いし月謝も安い。だが、少しゆとりのある家庭には、毎日の生活負担を軽くしてくれる全託園の方が人気だという。冒頭の女の子の母親は教育熱心で、上海でも有名な全託園の一つに子供を入れた。言葉の面でも、自分の親とは上海語で話すのに、子供とは標準語でしか話さない。子供に正しい標準語を身につけさせるためだ。この夫婦は子供の小学校入学に合わせ、買って四年しか経っていないマンションを売却し、評判のよい小学校に近く、地価も人気が高い住宅街に、新居を購入して引っ越した。「孟母三遷」を地で行く話である。

子供の伯母は一人が東京、もう一人がボストンにいて、生まれながらに留学切符を手に入れているようなもの。親としての期待が高まるのも無理からぬことだろう。

中国の幼稚園は三歳児からしか預からない。そのため、共働きの夫婦は幼稚園入園までの子育てを、妻の親と保育園（三歳まで）に委ねることが多い。その後も何かとおじいさん、おばあさんに頼ることになる。友人達に「毎日お子さんと会えなくて寂しくないの?」と聞くと、「仕事のある日は疲れていて大変だから、全託園はとてもよい」と同じように返ってきた。だが、子供は子供で「幼稚園はイヤ。おばあちゃんのうちがいい」と言う。毎週月曜日の朝は、どの子もぐずって大変だそうだ。

私の周囲の「働くお母さん」にこの話をしたら、これまた一様に「信じられない!」と返ってきた。

一つ気になったのは、友人の子供たちが、両親よりもおばあちゃんになついていることだ。親よりもおばあちゃんの言うことをよく聞く子もいるという。私も他人事ながら、子供が成長するにつれてどうなるのだろうか、と余計な心配をしている。

（いとう えりか／アジア経済研究所図書館）